

聖書：ダニエル 9：20～27

説教題：七十週の幻

日時：2015年1月25日

この箇所はダニエル書の幻の中でも最も難解とされています。ここに将来に関するスケジュールが述べられているということは分かります。従ってここに世界の成り行きが予言されているのではないか、終末に関する秘密が啓示されているのではないか。そういう関心から色々な人が色々なことを述べる箇所です。しかしこの幻だけを見つめて、その意味を読み解こうとしてはなりません。聖書を読む際に大事なことは文脈に注意し、話の流れの中でその箇所を位置づけることです。

前回、9章前半でダニエルの祈りを見ました。彼はエレミヤ書にエルサレムの荒廃が終わるまでの年数が70年と記されているのを見て、間もなくバビロン捕囚が終わることを知り、主に祈りました。特に彼が心を注いだのは罪の告白でした。今日の箇所もそうです。20節でダニエルは主に向かって自分の罪と自分の民イスラエルの罪を告白し、エルサレムのために伏して願いをささげていました。その時に御使いガブリエルが飛んで来て示したのが70週の幻です。すなわちこの幻はダニエルの祈りに応答して、主が与えてくださった幻です。ガブリエルは言います。22～23節：「私に告げて言った。『ダニエルよ。私は今、あなたに悟りを授けるために出て来た。あなたが願いの祈りを始めたとき、一つのみことばが述べられたので、私はそれを伝えに来た。あなたは、神に愛されている人だからだ。そのみことばを聞き分け、幻を悟れ。』」

まず24節にこの幻の目的が示されています。「あなたの民とあなたの聖なる都については、70週が定められている。それは、そむきをやめさせ、罪を終わらせ、咎を贖い、永遠の義をもたらし、幻と預言とを確証し、至聖所に油をそそぐためである。」ここにすでに一つのメッセージがあります。ダニエルは今、バビロン捕囚が70年で終わることを知りました。間もなくこの地の束縛から解放され、エルサレムに戻ることができます。しかしそれで神の国が来るのではない。なお70週という期間があるとこの幻は語っています。この70週の計画には6つの目的があると24節に示されています。前半3つはそむきをやめさせ、罪を終わらせ、咎を贖うことです。いずれも罪に関することです。神はこれによって罪の問題を解決し、ご自身の民を救い出してください。後半3つは永遠の義をもたらし、幻と預言とを確証し、至聖所に油をそそぐことです。罪を赦すだけでなく、神は永遠の義を与えてくださる。また約束の救いを成就してくださる。そして至聖所に油を注ぐという表現で示される豊かな御国の祝福に生かしてくださる。これはまさにダニエルの祈りに答えるものです。ダニエルは罪を告白し、

赦しを希い、救いの約束の成就を願いました。その彼に対して主は 70 週という計画をご自身が持っていることを示し、そこにおいて完全な罪の赦しと御国の祝福を与えてくださる。その秘められたご計画についてダニエルに教えてください。

25 節から 70 週の内容について示されています。まず押さえるべきは「週」という言葉です。これはもともと「7」を意味する言葉でした。私たちは「週」という言葉で 7 日間を想像しますが、必ずしもそうでないことになります。むしろこの 7 は 7 年を意味すると多くの人は見ます。すると 70 週は $7 \text{年} \times 70 = 490 \text{年}$ 。そしてこの数字から歴史に当てはめて色々なことを言う人がいます。しかし前にも申し上げたように、黙示文書における数字の解釈は慎重でなくてはなりません。ちなみに 7×70 で思い起こすことは何でしょうか。それはペテロが何度まで赦すべきでしょうかと問うた時のイエス様の答えでしょう。7 を 70 倍するまでとイエス様は言われました。しかしその意味は 490 回までは赦すべきだが、491 回目になったら赦さなくて良いということでしょうか。誰もそうは取りません。つまり字義的に取っていない。まして今見ているのは幻です。ですから象徴的な意味で語られ得るものとして読む必要があると思います。

25 節以降を見ると 70 週は三つの時期に区分されていることが分かります。最初の 7 週、次の 62 週、そして最後の 1 週です。まず最初の 7 週のことを 25 節前半にあります。「それゆえ、知れ。悟れ。引き揚げてエルサレムを再建せよ、との命令が出てから、油そそがれた者、君主の来るまでが 7 週。」ここで「引き揚げてエルサレムを再建せよ」との命令が出た時とはいつでしょうか。実際にこの命令が出たのはペルシャの王クロスによってです。しかしこれはエレミヤ書の預言に基づくものですから、エレミヤが主からの言葉を語った約 70 年前を指すと見ることも可能です。どちらであっても当面問題はありませぬ。では 7 週後に来る「油そそがれた者、君主」とは誰でしょうか。二つの可能性があります。一つはペルシャの王クロスであるという見方です。先のエルサレム再建命令が 70 年前のエレミヤの預言であるとするなら、この解釈は可能になります。もう一つの見方は、これは真に油そそがれた方、イエス・キリストを指すという解釈です。とりあえずここではこの二つの可能性を残しておきます。新改訳をそのまま読むと 25 節後半にはこうあります。「また 62 週の間、その苦しみの時代に再び広場とほりが建て直される。」これは普通に考えると、エルサレム再建のことではないかと思ひます。そうだとすると疑問が湧いて来ます。エルサレムの再建命令が出て 7 週目に油そそがれた者が現れたのに、エルサレム再建が 62 週も後というのは、あまりに時間がかかり過ぎではないかということです。この疑問もここに残しておいて先に進みます。26 節には、その 62 週の後、油そそがれた者が断たれたとあります。この「油そそがれた者」は 25 節の「油そそがれた者」と同じ人でしょうか、別の人でしょうか。

基本的に 26 節の「油そそがれた者」はイエス・キリストを指すと見る点で多くの人は一致します。このあと見ますが、「断たれた」は十字架の死を指していると考えられるからです。するとどうなるでしょう。25 節の「油そそがれた者」もイエス・キリストだとすると疑問が湧いて来ます。エルサレム再建命令から 7 週経ってキリストが現れたのに、それから 62 週経ってから十字架にかかったというのは時間が空き過ぎではないかということです。では 25 節の油そそがれた者はペルシャの王クロスだとするとどうでしょうか。その場合、彼が現れた後、62 週という長い年月を経てキリストが現れて十字架にかかったことになります。こちらの問題は「油そそがれた者」が近い節に 2 回出て来るのに、別々の存在を指すのは不自然ではないかということです。

今は新改訳に沿って考えましたが、25 節は別の理解も可能です。新改訳では 7 週と 62 週の間句点があつて文章が区切られています、ここはワンセットの言葉として読むことが可能です。新共同訳聖書の 25 節はこうなっています。「これを知り、目覚めよ。エルサレム復興と再建についての御言葉が出されてから油注がれた君の到来まで七週あり、また、六十二週あつて危機のうちに広場と堀は再建される。」これによれば、エルサレム復興と再建についての命令から油そそがれた者の来るまでが「7 週と 62 週」と言われています。すなわち油そそがれた者は 7 週の終わりに来るのではなく、7 週と 62 週の後に来る。ではなぜ「69 週」と言わないで、「7 週と 62 週」に分けたのかと言えば、それはおそらく途中でエルサレム再建の時期を位置付けるためと思われる。すなわち広場と堀が建て直されるという途中の出来事までが 7 週で、キリストが来られる時までが 62 週であると。アウトラインを記した紙に NIV の訳も載せていますが、そちらでも 7 週と 62 週はひとまとまりのものとする訳となっています。

さてこうして 26 節には 62 週の後、初めから数えて 69 週の後、「油そそがれた者は断たれ、彼には何も残らない」と言われています。これは先に触れたように、イエス・キリストの十字架の死を指していると考えられます。「何も残らない」というのは、キリストがご自身のすべてをささげ尽くして、ご自身に何も残されなかったことを示すと考えられます。十字架上の「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」という叫びにそれは示されています。しかし 26 節後半にはまたエルサレムの聖所が破壊されるとあります。イエス様の十字架の後、エルサレムを破壊したのは紀元 70 年のローマ軍総督ティトゥスです。26 節に「洪水が起こり」とありますが、まさに洪水のようにおびただしい軍隊が押し寄せて来てエルサレムは陥落する。イエス様もその日が来ることをこのダニエル書を引用して予告されました。

そしてさらに難しいのが 27 節です。27 節最初の「彼」とは誰のことでしょうか。もし 27 節が 26 節に時間的に連続するなら、この「彼」は前の節の「来たるべき君主」

を意味します。彼は多くの者と堅い契約、すなわち悪の同盟を組んで、半週の間、いけにえとささげ物とをやめさせる。すなわち神殿礼拝生活を妨害・混乱させます。そして荒らす忌むべき者が現れます。これはついに現れる究極的な恐ろしい敵のことでしょうか。しかしその荒らす者に定められた絶滅がふりかかる。一方これと別の見方もあります。それは 26 節と 27 節は平行関係にあると見る見方です。構造的にこの幻は 24 節でまず目的について語り、25～26 節で 70 週の幻全体を示しました。26 節は「その 62 週の後」と始まっており、最後の 1 週のことを語っています。そしてこのクライマックスである最後の 1 週について、再度 27 節で詳しく語っていると見る見方です。とすると 27 節最初の「彼」はイエス・キリストのこととなります。その方が「多くの者と堅い契約を結ぶ」。すなわち十字架のみわざを経て、恵みの契約を確かなものとして完了へ至らせる。そしていけにえとささげ物をやめさせるとは、十字架によってそれまでの儀式律法を不要なものとしたということです。しかしそれで終わりとはならず、荒らす忌むべき者が現れる。これは 26 節で聖所を破壊した「やがて来たるべき君主」と同じ人になります。しかしその神の敵も、最後には滅ぼされることが定められている。

以上、難解な点は残るにしても、この幻の基本メッセージは分かると思います。二つのことを学ぶことができます。一つはイエス・キリストによる罪の赦しということです。ダニエルは 9 章前半で、罪の告白をし、赦しを願い、神の祝福を祈りました。どのようにしてその恵みにあずかることができるのでしょうか。この幻の中で明らかにされたことは、やがて現れる油そそがれた者が断たれることを通してということです。その方が「何も残らない」と言われるほどの状態に至ることを通して。すなわちそこでその方によって大変な犠牲が払われる。やがて現れるメシヤが私たちの救いのためにとてつもない代価を払ってくださる。その方を通して 24 節の祝福、すなわち罪が赦され、永遠の義を与えられ、神の全き祝福に神の民は生かされる。神はその方を通してダニエルが求めた罪の解決をなし、彼らを救ってくださるのです。

もう一つのメッセージは、神に信頼する民にはなお長い戦いの道のりがあるということです。バビロン捕囚の 70 年が満ちてエルサレムに戻って終わりではなく、なお 70 週という神のスケジュールがある。その中で定められた時にキリストが現れますが、その後も反対勢力の活動がある。聖所が破壊され、あらず忌むべき者が現れる。しかしその絶滅は定められており、最終的に神が勝利する。だから思うような状態でなくても、困難ばかりが続く毎日でも、油そそがれた者を通して神が備える勝利と祝福を待ち望んで、耐え忍ぶ歩みをするように！ということではないでしょうか。

今日の私たちの地点に立てば、すでに油そそがれた方は来られました。神はご自身

の約束に真実であられて、その方を送ってくださいました。そしてその方の大きな犠牲によって、罪の赦し、永遠の義、御国の祝福が勝ち取られました。私たちはこのキリストを信じる信仰を通して、神が備えたもうこれらの祝福に生かされる者でありたいと思います。そして今日の私たちにとっても、なお最後の日までは戦いがあります。ここでの荒らす忌むべき者は直接的には紀元 70 年のティトゥスを指しており、イエス様も福音書でそのように述べておられますが、同時にイエス様はその出来事をさらに将来にある世の終わりの出来事とダブらせて語られました。確かに最終的な救いの日はまだ来ていません。しかしどんな混乱があっても、神に逆らって立つ荒らす者の絶滅は定められています。神はご自身に反抗して立つ者を必ず最後に滅ぼし、ご自身の勝利を明らかにされます。私たちは油そそがれた方キリストに感謝し、信頼して、キリストにあって神が導いてくださる歴史の中を歩みたいと思います。神ははっきりしたご計画を持って歴史を導いて下さっていること、キリストにあって信じる者の罪を赦し、義をもたらし、永遠の幸いに導き入れてくださることを仰いで、神に信頼して従う祝福の歩みへ進みたいと思います。